

故・伊藤義教氏転写 & 翻訳  
ゾロアスター教書籍パフラヴィー語文献  
『デーニカルド』第3巻訳注・その4

青 木 健

序 文

本稿は、青木健、「故・伊藤義教氏転写 & 翻訳ゾロアスター教書籍パフラヴィー語文献『デーニカルド』第3巻・その3」、『東京大学東洋文化研究所紀要』第148冊，pp.236-178を承けての続編である。本号では、『デーニカルド』全420章中の、第42章から第52章をカバーした。また、本稿でも、入力に際して、東洋文庫非常勤職員の深見和子さんのお世話になった。記して感謝したい。

第34ページ転写

---

(42)<sup>(239)</sup> abar mehīh [i] ud frāzīh ī āsrōnīh abar

artēštārih <ud> wāstaryōših

az nigēz ī Weh Dēn

hād mehīh ud frāzīh ī āsrōnīh az artēštārih

---

239 Madan 版第34ページの第1行目から。

〈ud〉 wāstaryōših ī az was čim paydāg [ud] u-š ① ěk ěn

kū

artēštārih pad āsrōnīg druž ī mēnōg zadan

ud wāstaryō-

ših ī pad āsrōnīg yazadān yazišn sāxt har 2

andar

āsrōnīh saxwan + xwēš + grīwīg bē-šān ān hammōg

kunišn pad

rašišn ī az āsrōnīh ∴ ② ěk ěn kū dānistan kar-

dan ī

kadār-iz-ē ī mardōm parrēzišnīg čiyōn šnāxtan

ī dādār ud

was kirbag wināh az ārōnīh awēšān-iz pēš ud

mādagwar az

har kār ī-šān andar xwēš wimand ∴ ③ ěk az

fradomīh ī

āsrōnīh pad im ošmurišn mehīh ī pad-iz gāh ī

daxšag ī

āsrōnīh artēštārih ud wāstaryōših ∴ ④ ud ěk

az-iz tan ī

mardōm mehīh 〈i〉 sar 〈i〉 āsrōnīh abar dast ī

artēštārih

ud aškam ī wāstaryōših ud pāy 〈i〉 + hutuxših

+ nišān

nimūdārih sar [ud] mehīh ī abardarih ī + āsrōnīh

abar

sar abar artēštārih ī abar dast ud wāstaryōših

ī abar

aškam ud hutuxših ī abar pay nišān :’ ⑤ēk

nazdistārih ī āsrōnih ī ō ruwān ī-š abar kē

ka-iz<sup>(240)</sup> ī

nām pad ān ī āsrōnih 《kē ka<sup>(241)</sup> asar-ruwānih》

nimūdār [’:]

paydāgih ī az Weh-Dēn āsrōnih pad <w>āpuhra-

gāndom

#### 第34ページ翻訳

---

(42)<sup>(242)</sup> 神官職が戦士職や農耕職

---

240 =kū

241 =kū

242 本章は、古代イランの3階級（または、工匠職を加えて4階級）社会構造を論じる際に、よく引用される章である。サーサーン王朝時代のゾロアスター教神学では、人類史に於いて各個人が救済の為に果たすべき役割が定められており、その目的に向かって、神官職を頂点とする社会組織も決定されていると説かれる。Molé [1963: 423-424] 参照。また、注150及び後出の第69章も参照。サーサーン王朝時代の階級概念については、Ahmad Tafazzoli, *Sasanian Society: I. Warriors 2. Scribes 3. Dehqāns*, New York, 2000, pp. 1-17も参照。

この階層構造については、『アヴェスター』には言及があるものの、ハカーマニシュ王朝時代・アルシャク王朝時代の資料には言及がなく、サーサーン王朝時代になって再び表面化する。（A. Perikhanian, "Iranian Society and Law," *The Cambridge History of Iran*, 3-2, 1983, p.632参照。）この為、どこまで実体を具えた理想像だったのか不明である。

よりも偉大にして優先していることについて。

ウェフ・デーンの示教から。

さて、戦士（王侯）職や農耕職よりも神官職のほうが

偉大にして優先していることは多くの理由から明らかである。そしてそれ

（ら）のうちの①一つはこれ、曰く

戦士職は神官がメーノーグ的ドルズを打倒することによって、

そしてまた農

耕職は神官が神々を祀ることによって堅固（sāxt）となる。これら2職は

いずれも神官職

という語<sup>(243)</sup>に属するものなかにあつて頸部を構成するものであるが、神

官職から（教えが）到来することにより、その教え

をそれら（2者）が実践するのだということである。②一つはこれ、曰く：

どんな人にも仕残りとなるべきことを

知り実践すること、例えば創造主や

多くの善悪行を知るごときこと、は神官職から出ているという

こと、これらのことこそ、それら自身の領域における

あらゆる役割のうち先行し基本的なものだ、ということ。

③一つは、

神官職、戦士職および農耕職とこう数える（列挙する）ときに

---

243 asrōnih という語の中に artēštārih や wāstaryōših という語と部分的に普通があるかのようにみているのである。

ゾロアスター教書籍パフラヴィー語文献『デーナカルド』第3巻訳注・その4

神官職が首位にあることから、象徴の坐と共にある  
その偉大さが出てくるということである。また④一つは  
人体

からでも、戦士職なる手や農耕職なる腹や

工匠職なる足の上方にある、神官職なる頭の偉大性が  
特色を

示しており、手位にある戦士職と腹位にある農耕職と

足位にある工匠職との上にある、頭位にある神官職のもつ

あたま

頭の偉大性即ち至上性が特色を（示している）ということである

⑤一つは

神官職の君臨する (i-š abar) 魂にその神官職が至近と

いうこと、それは (kē) (ruwān という)

名が āsrōnih (神官職) のそれ (名) と共にあるということ《即ち

無終の魂を有しているということ》を示すものだとということ、

だ、とは、ウエフ・デーナからの所詮である。神官職は Ohrmazd の

最も特別な場にいる点において

第35ページ転写

---

gāh ī Ohrmazd wābar gugāyih ī mehīh āsrōnih

az artēštārih ud wāstaryōših ∴ (止)

(43) abar ān ī az dēn andarz mardōm pad

rāyēnīdan

padiš + xwēšēnīdār bawēd ⟨i⟩ har ⟨2⟩

axwānīg

nēkīh az nigēz ī Weh-Dēn

hād ka Weh Dēn + nigēzig dānišn[ig] ādān ō

xwāstag ādān[i] ⟨ēd⟩ kam-ādān dānišn pad dānišn

ud xwāstag ādān

ō dānišn ⟨ādān⟩ ēd kam-ādān xwāstag pad

xwāstag taftig rād

ud nērōg ādān az ādān ī<sup>(244)</sup>-šān har 2 sazāgihā

bahrwar pad

nērōg ō-šān har 2 + bowandag pānag bawēd

hambastag spurr

xwēšēnīdār bawēnd ī 2 axwānīg nēkih ud padiš

ārāyihēd

wirāyihēd pērāyihēd gēhān abazāyēnid weh

dahišnān

bōzihēnd ud burzihēnd mardōm ∴ (止)

(44) abar hangāmīg + āyōzišnih ī yazadān ō

wānīdan ī hamēstār

ud spōxtan ī [∴]

+ az dāmān petyārdārīh az nigēz ī Weh-Dēn

hād yazadān az dādār framān ō wānīdan ī bē

burd〈an〉 ī petyārag az amaragān ēk-iz ēk

mad hangām ī ān

petyārag pad kam zyānīh ī dāmān bē burdan ēdōn

čiyōn

dānāg + bizešk<sup>(245)</sup> [ud] bē burdan ī

wēmārīh az tan andar winārīšn ī

čīhr nērōg 〈ud〉 šnāsag warzīgar pāxt〈an〉<sup>(246)</sup> ī rēman

az jōrdā abāg

an-abesihišnīh ī abāg nēnōg rēman jōrdā bawēd

ud mad ān

第35ページ翻訳

---

神官職が戦士職や農耕職よりもより偉大なることに

ついでに信憑すべき証拠（確証）を有するのである。

(43) 人は統御するにあたってデーニのアンダルズ  
に従い

---

245 bizehk の可能性もある。

246 この単語の解釈は分かれる。Molé [1963: 429] は、pišt=élimine ととったし、Menasce [1973: 55] は、+pēxtan=arrache としている。本稿では、pāxt と転写して、pāk と wēxtan の混淆形と考え、「(けがれを) 払拭する」と訳した。

それによって両界の幸いの

所有権と

なることについて。ウエフ・デーンの示教から。

さて、ウエフ・デーンの示教であると、知の富は

財の富となる、これは少富の知には知によって（強固

な施与と力が生じるということであり）、また財の富は

知の富となる、これは少富の財には財に

よって強固な施与

と力が生じるということ、富は富から生じるのである。彼等（人々）にし

て（知と財が）二つとも適正に力において

配分されていれば、彼等に二つの完璧な庇護者が生じるし

それと共に彼等は、両界の幸い

の完全な所有者となり、そしてそれによって世は

整復され

陶冶され綺飾され、善き創造物どもは

成長し

人（々）は救われ、そして称賛されるであろう。

(44)<sup>(247)</sup> 敵手を制圧し 諸創造物から

---

247 本章は、サーサーン王朝時代のゾロアスター教神学で重要な役割を果たした「3つの時（善と悪の創造／善と悪の混合／善の勝利と悪の敗北）」の教義の中の、混合から善の勝利に移行する段階を示した実例である。故・モレが、『メーノーグ・イー・フラド』の第27章と共に、主題的に検討している。Molé [1963: 428-433] 参照。



仇敵を排除するために神々がその時期に

努め給うことについて。ウエフ・デーンの示教から。

さて、神々は創造主の命令によって仇敵を一般に人々の

一々から制圧し除するために在します。

その時期が来て

仇敵を諸創造物の禍害を少なくして除去しましたことは このようです

すなわち

賢明な医師が（体の）本性の力を整えてやりながら

身体から病気を

除去し、また知識のある農夫が、けがれが力とともに

穀類についている、（その力が）

無くならないようにして穀類からけがれを払拭するようなものである。

そして その時期が

第36ページ転写

---

hangām az dādār framān tēz pad anspōzih

rasēnd tagigihā

ōzanēnd hamēstār pad an-abāz āxēzišnih

[ī] ud + wuzurg + sūdōmand <ih>

gēhān dēn frāxih ud xwā (h) rih ud dagran <d> -zam-

ānih āsānēnd dahišnān

pad + abēbimih ī az hamēstār rāmišn mānišnih

gēhān ∴ (止)

(45) abar winastagih ī mardōm pad gyān <ud>  
tan ud xīr <ud>  
rāyēnišn az nigēz ī Weh-Dēn

hād az dēn nigēz dādār bowandagih ī-š pad dād-

ārīh pad <wi>sp mardōm pad gyān ud tan ud xīr <ud>

rāyēnišn + a-

winast + ud + asēj<sup>(248)</sup> + ud an-āhōg + dād āhōgōmandih

ī-šān ①pad

gyān az dānišn kastagih <wi>nastagih ī [ud] gyān dru-

wandih-iz ī axw<sup>(249)</sup> <ud>

②pad tan az-iz āmēzišnigān + wināhišn ī wēnārīh

ud margih-iz <i> axw<sup>(250)</sup>

---

248 これは、パフラヴィー文字の綴りのままでは意味がとれず、解釈が分かれる語である。Menasce [1973: 56] は、'šyt? と翻字して、訳していない。Fazilat [2002: 166, V\] は、a-kast と転写して、bī hīch kāsti = 「いかなる欠点もなく」と訳している。本稿では、a-sēj と転写して、「危険なく」と訳した。マイナス・イメージの名詞・形容詞に否定の a- が付いていることは確かなのだが、後半の語は不明である。

249 Menasce [1973: 56] は、エメンドして +vihān と転写し、cause と訳している。Fazilat [2002: 166 V\] も、wihān と転写して、'ellat = 「原因」と訳している。この場合、①以下の文章は、「生霊に関して言えば、知の欠乏と生霊の敗壞から、不義性の原因（がある）」と訳される。ただ、原文の単語を素直に読めば axw = 「生氣」であるし、gyān = 「生霊」に於ける悪徳性の根元を「生氣」の不義性に求めるのも無理がないと考えたので、本稿ではこう訳した。

250 注249参照。

ud ③ pad xīr az xwarrah tarwēnīdār škōhīh ud

④ pad rāyēnišn az

ristag wišuftār frehbūd apaymānih ud + abēbūd

tuhīgīh

+ kāstan winastan ast ī dādār bowandag dahišnih

[ud] az appurdār ī

dādār dahišn dušm(en) ān sazīd and-čand abar

mardōm pad gyān

dānišn <ud> pad tan drustih [ī] <ud> pad xīr ābādih ud pad

rāyēnišn

paymān agar az dādār pānagih ud abarōzih ī-š

abar appurdār

zōr [ud] frāz nē hišt ī-š appurdār ō appurdan ī

hamāg-

ihā [ud] abar mardōm ast pad abāyiniḡih ī xwēš

ud

xwēšigān nekīh ud an-abāyišniḡih anāḡih ēn ī,

+ baxt<sup>(251)</sup> nekīh

pānagih kardan az appurdār xēmig āzārēnīdār

aziših

---

251 これも、解釈の分かれる語である。Menasce [1973: 56]は、ēn ī nihāt? と転写して、qui y serait mis と訳している。Fazilat [2002: 167 Vㄨ]は、wāxt(?) と転写して、in gūne gofte ast = 「このように語っている」と訳している。この場合、「以下のように語られている、即ち、幸いを…から後援するのである」と訳される。これに対して、本稿では、+ baxt nekīh で一纏まりと見て、「頒与されたる幸い」と訳した。両方の解釈が可能。

pahrēxtan ʾ: ud kēšdārān +kē ān dāšn dādār xwad abāz

第36ページ翻訳

---

来て（神々は）創造主の命令によって速やかに諾々として  
到来し給い勇敢に  
敵手を再び甦ることのないように打倒し給い  
そして 大利が  
世にあり、デーニに幸いと安楽と悠久な時  
間があり、諸創造物は敵手から無  
畏となって安息し 歡喜が世に  
止住することになる。

(45) 生霊と肉体と財貨と措置 (rāyēnišn)

における

人間の敗壞について。ウェフ・デーニの示教から。

さて、Dēnの示教によると、創造主についていえば、彼の完璧さは  
彼が創造主たる  
資格において、すべての人間を、(かれらの)生霊と肉体と財貨と  
統御において 敗  
壞することなく、危険にされされることなく、また悪徳化することのないよ  
うに創造した (+dād) ということにある<sup>(252)</sup>。彼等  
の悪徳性（のことだが それ）は、①生霊においては知の欠乏による  
生霊の敗壞、生気の不義性そのものに由来し、また

---

252 pad...1.2の最初の pad

②肉体においては（構成する）諸要素の破損 — それは病気

や生気の死そのもの — から由来し、

また③財貨においてはファルナフを凌ぐ貧窮から由来し、また

④統御においては

習慣の破壊者たる過多の無中庸性と欠如の

虚無性から由来する。

創造主の完璧なる創造の業を<sup>わざ</sup>貶<sup>おと</sup>しめ破壊することは

人間の上にある（具わっている）その人の生霊の知にふさわしいだけのもの

と肉体の健康にふさわしいだけのものと

財貨の繁栄にふさわしいだけのものと統御の中庸にふさわしいだけのものを

奪取するものたる、創造主の創造物の仇敵どもに

由来するのです。もし創造主によって御庇護と奪取者の

力にまさる彼（主）の増上力

が放棄されないなら — 奪取者がその彼（主）のすべてのもの

を奪取することに

向かっているのだ — 人間の上に 必然的なるものとして自身

や

自身の者どもの幸いがあり、そして不詳は必然ならぬものとなるのである。

これは すなわち領与されたる幸せを 奪取差、稟性的な毀損者から

保護するということであり、

（彼らから）出てくるものを防ぐ

ことである。また、かの施物を与え手（創造主）自身が取り

---

第37ページ転写

appurdān[i] kēš ī-šān abar dādār abargār-iz wināh

ud druwandih

ud tabāhīh ud anāgīh kām-iz ī dahišn [ud] + asazāgīh pad

dādār

guft[an] <ud> yazadīh aziš bē guft bawēd

(46) abar xwēškārān xwadāyān bē burdan ī

az mardōm škōhīh ud niyāz

ud + tangīh [i] + ud + hiyadagīh-iz winastagīh čand

šāyēd az nigēz ī Weh-Dēn

hād az dēn nigēz xwadāyān čiyōn-šān anēr dušmen

az xwadāyān + gizastag az šahr abāz dāštan xwēškārīh

ēdōn-iz škōhīh ud tangīh ud niyāz ud hiyandagīh wi-  
nastagīh az

awēšān ī andar xwadāyīh spōxtan bē burdan ī pad  
čand andar

gēhān nērōg-<ba>xt čār nigerīdan kardan andar  
xwadāyān ōy burzi-

šnīgdar kē škōhīh ud wēmārīh čand čārīg az šahr  
mard-

ōmān ēdōn <bē> burd ēstēd : andar ān ī ōy xwadāyīh

driyōš[ih] ī

bē dard wēmār ī aburd-[ud] darmān ēk-iz paydāg nēst

rāyēn-

idārīh ī abar ēn bē az dēn nigēz ud andarz az +aj-

gahānih waranīg ī az xwēškārīh [ud] ahunsandīh rāy bē

kardīg zāyišnīg [ud] 4 frāxēnīdār ō xwēškārīh āyōxtan

padiš tuxšāgēnīdan ud kē awah<ā>nīh ī abzār ī xwēškārīh

u-š atuwānīgih ī padiš nē čiyōn warzīgar gāw [ī] ud any

abzār ī warzīgārīh ud abārīg pēškār abzār ī-šān kār

ān ī kār ī padiš rāyēnīdār abzār dād padiš abē [ud]

第37ページ翻訳

---

戻すと説くドグマ者たち — その彼等は創造主・崇きものについて

罪悪と不義

と破壊と不祥（といった）創造主にふさわしからぬ創造物の意

欲を

語って 神聖を彼（神）からはなして語ったことになる。

(46)<sup>(253)</sup> 責務を果たす国王たちが人（々）から

貧窮と欠乏

と困厄とさては病氣や疾病をも出来得る

かぎり除去することについて。ウェフ・デーンの示教から。

さて、Dēn の示教によると、諸王の呪うものたる粗野な仇敵を

自身に (-šān) もっているが故に その諸王の、国から(それを)遠ざける  
という責務は

まさにこのようなものである：貧窮と困厄と欠乏 (niyāz) と疾病と  
敗壞を

---

253 本章については、Molé [1963: 44-45] が、ゾロアスター教とイラン王権の理想的な関係を示した文章として注目した。ただ、王権の責務の具体的な内容としては、①医薬品の施与、②4階級制の活性化、③婦女と未成年者の保護、④火と水と大地の清浄化が挙げられており、これらはホスロー1世 (r. 531-579) の治績とされているものと一致する。現存するゾロアスター教パフラヴィー語文献に描かれている国家や社会の組織は概ねホスロー1世時代以降のものと考えられており、当時の現実が後に理想の聖代と仰がれるようになったのか、後代のゾロアスター教神官の理想がホスロー1世時代に投影されているのか、はっきりしない。この点では、歴史を捨象して「イラン宗教の構造」を抽出しようとするモレの試みが成功しているかどうか、慎重に判断しなくてはならない。ゾロアスター教神官の立場から、ホスロー1世のmazdak教撲滅と正統ゾロアスター教復興(4階級制の復興を含む)を讃えた文献としては、『デーナカルド』第4巻(テキストはMadan [1911: 413]、英訳はShaki [1981: 115-121])を参照。タバリー(d. 923)を資料に、ホスロー1世の税制改革を検討した研究としては、F. Altheim und R. Stiehl, *Finanzgeschichte der Spätantike*, Frankfurt, 1957を参照。その他、ホスロー1世に関する1982年までの情報としては、R. N. Frye, *The History of Ancient Iran*, München, 1982, 325-334参照。



ゾロアスター教書籍パフラヴィー語文献『デーンカルド』第3巻訳注・その4

その支配下にあるものどもから排除し除去することで、これは (i)

この世界にあつて

力を頒与されているいくつかの方策に目配りすることによって実行すること  
である (kardan)。国王たちのうちで、(以下にのべる) もの

が最も尊敬さるべきものである、即ち (kē) 貧窮と病気のある限りの

手段を講じ(る身となつて) 国の人々の

もとからこのように(以下に述べる事をさす) 駆逐したものである：その彼  
の王国では貧困者が

苦むこともなく、病人にして薬の服用のできぬものは一人もあらわれない  
でこれへの

措置(施策)は Dēn の示教やアンダルズから逸脱して (l. 16の bē az...)

怠

惰のために貧欲となり 責務への不満のために

活動に基づく生産から外れた (bē kardig zāyišnīg) 4 (職能階級) を

活性化し責務に結びつけ

それによって勤勉ならしめること。そして又そ(の尊敬さるべきも)のは責  
務の用具の砦であり

そして彼のその(砦)には「不可能」(の語)はなかったこと、宛も農夫  
(と)牛やその他の

農業の用具ならびその他の彼等(農夫)が用いる職業用具のようなもの

それ(働き、役割)のため<sup>(254)</sup>措置者(創造主)が用具を与えた(創造し賜  
うた)ところの、その役割をば それ(具用)を以て<sup>(255)</sup>間違い(āhōg)

---

254 padis...最初の方

なく (abē)

第38ページ転写

---

āhōg kardan kē pīrīh ayāb armēštīh rāy hammnis

+ wisistag<sup>(256)</sup>

zan + wisistag apurnāyīg kē abargraz ī niyāz aziš

abāz

dāštār tuwānīg kas nē paydāg az kardag ow<ō>n-iz [ud]

šk-

ōhīh spōz rōšnīg [‘.‘] dēnīg abar rāyēnīdan rawāg dāštan

framūdan kū nē niyāz dāšt<an> ō bē dardīg zīwišn xwāhīh

ud wēmārih ud waštīh čār rāy andar šahrihā pad-iz deh

wēmārestān abē-āhōg pad ruwān dōst šnāsag bizešk

ud ōstwār ī padiš dārōg ud darmān abāriḡ ān kār rāy

abē-+āhōg kardan framūdan ud hamē andar pursišn

---

255 padiš...2番目のもの

256 解釈の分かれる語。テキストのパフラヴィー文字は曖昧で、wsptk, wyyptk, nsptk, nyypkなどの複数の読みを許容する。Menasce [1973: 57]は、vēftakと転写するものの、訳していない。Fazilat [2002 173 V9]は、nasīnidag(?)と転写して、az kār oftāde(?)と訳している。本稿では、婦女や未成年者の悲惨な状況を示す形容詞として、wisistagと転写し、「痛めつけられた」と訳した。

ゾロアスター教書籍パフラヴィー語文献『デーンカルド』第3巻訳注・その4

wizōyišn ī

wirāyišn dāštan mādagwar hamāg dādestān andar

šahrīhā

wistardan kē padīš šahr ābādān padēhk<sup>(257)</sup>

ud huškīh ud škōhīh ud niyāz az amaragān

mardōm [ī]

frāz mālišnih bawēd pad +hubōy ī abar ātaxš ud

āb ud zamīg ud pahrēz ī andar⟨w⟩āy kē nastagih

ud +pū-

dagih ī aziš kū ō wihān [ī] wēmārih ud waštagih ī

+mardōm ma rasād ān ī nē bawēd bē pad

ātaxš ud āb ud zamīg pahrēz ēn weh dēnān

andarz

az dahibedān framān awesrīghā andar gēhān ∴ (止)

(47) abar ān ī

kēn abāg dāštan sazēd az nigēz ī Weh-Dēn

---

257 Menasce [1973: 57] は、patyāk と転写して、messenger と訳している。本稿では、padēhk と転写して、「砦」と訳した。これは、<\*pati-daēz-ka-の中世ペルシア語形で、バルティア語なら \*pattēšk とする筈である。daēz-「積む」については、M.Mayrhofer の altindisch の語源辞書 DEH の項をみよ。然し、padēx の誤記ではなからう。(この注釈は、伊藤氏のノートによる。)

hād az Weh Dēn nigēz [i] kēn dāštan abāg ān

sazāg ī abāg kōšīdan [ud] +sazēd +ud kōšīdan abāg

ān ī sazēd ī

az hamēstārih ud zyāngarih ī mardōm ud ān ī

mardōm gyān

第38ページ翻訳

---

果たす (kardan) ことであり、(また) それは老齢や虚弱のために

窮乏のとりこになって痛めつけられた婦女、痛めつけられた未成年者をみな

それ(窮乏)から遠ざ

ける人である。富める人は(その)所為がかほどにも貧窮

を排除するものであることを知らない。(それが)わかっているDēn者は

(その所為を)高揚し進展させ(そしてこう)

命ずべきだ『痛みのない生活を求めるのに欠けるものがあってはならぬ』

と。

そして病気と疾病への対策のために洲々の村<々>に

病院を、靈を愛する有識の医者と共に 手落ちなく<設置し>

また 彼(医師)に依る確実なる薬剤と療法やその他のものを

その役割に沿うて

手落ちなく設置することを命ずべきだ。そしてつねに質疑と

研鑽と

ゾロアスター教書籍パフラヴィー語文献『デーンカルド』第3巻訳注・その4

陶冶の中に（身を）保ち、主要な決定（dādestān）にして

よって以て国の栄えの砦となる

ものはすべて諸洲に流布（施行）すべきである。

（かくして）旱魃と貧窮と窮乏が一般の

人々から

掃い去られるであろう — 火と水と地における芳香

ならびに そこからけがれと汚穢<sup>おわい</sup>の出る大気（andar<w>āy）

の防衛によって — ， けだし よき人々に人間の病氣や疾病

の及ぶことなからんがためであって、これ即ち火と水と地の

防衛によってでなければ

起こらないところのことである。これこそ諸国王の命令から

出て世に依りどころとなる、

善教徒への andarz なのである。

(47) それに怨みを抱くこと

がふさわしいということについて。ウエフ・デーンの示教から。

さて、ウエフ・デーンの示教によると、それと戦うのが正しい

とされるものに怨み

を抱くことはふさわしい、そして また 人間への対抗と

加害の故にそれと戦うことはふさわしい、そして人間の生

靈への

第39ページ転写

---

---

ayār +dāšn +awardišnig kē hēnd dēw [ud] abāg-iz-i

ān i wattar mardōm ayār ayārih nēst u-š ō

mardōm i mardōm i ayār hamēstār i dēw dēw

ay-

ārih paydāg ān pand abāg weh mardōm abāg-iz ān

watta-

rih ō wēhih wardēnidan ča[y]r ast kōšidan nē

dānāgih bē wehih došāram abāg warzīdan<sup>(258)</sup> ud nēkih

padiš

kardan ud ān wattar pad dānāgih ō wehih ward-

idan Weh

Dēn passand ud dastwar ∴ (止)

---

258 Menasce [1973: 58] は、*vartitan* と転写して、*changer* と訳している。

259 この単語は、パフラヴィー文字の綴りを素直に読めば *Ohrmazd* であり、Menasce [1973: 58] や *Fazilat* [2002: 181 A ʔ] もそう解釈している。しかし、決定的に拙いのは、この場合、訳文が「オフルマズドの諸創造物である対抗者の種類と彼らの力の制圧について」となり、対抗者 (*hamēstār*) が「オフルマズドの創造物」になってしまう点である。そこで、本稿では敢えて *hannāmān* = 「肢分、メンバー」と読み、「諸創造物の諸肢分の対抗者」と訳した。これだと、複数の肢分の内容が、本文中の「メーノグ、本性、肉体」に一致するので、かなり正当性のある訳だと思う。

(48) abar ēwēnag ī hannāmā<n><sup>(259)</sup> <ī> dahišnān  
+ hamēstār u-šān  
wānīdārīh <ī> nērōg az nigēz ī Weh-Dēn

hād + hamēstārīh ī Ohrmazd dahišnān ēwēnag

hangirdīg[ān] 3 ①ēk <pad> mēnōg [':'] ud ②ēk pad čīhr ud

③ēk pad tan dwārišnīg petyārag ': ①<pad> mēnōg dwāriš-  
nīg

petyārag [ud] mēnōg dēw ud druz ': u-šān wānīdārīh

az Weh-Dēn nērang ī yazišn [':'] warzišnīh ī abāriḡ xūb

ēwēnīh nērōg <az> + dušdēnīh dēw-ēzagīh ud abāriḡ  
dušēwēnīh ud

②ān ī pad čīhr dwārišnīg āz ud arešk ud abāriḡ [ī] čīhr  
ī

+ō hunar ī padīš petyārag u-šān wānīdārīh az āsn-  
xrad

---

260 解釈の分かれる語。Menasce [1973: 59] は、xvābdārān? と転写して、de somnifères と訳している。しかし、この場合、テキストを改変している上に、「睡眠薬の投与によってドルズを制圧する」との訳文になり、甚だ文意を得ない。Fazilat [2002: 181 ㄨ] は、xūb-dārišnīh(?) と転写して、xūb negāh dāri-ye tan と訳している。これも、テキストを改変した読みである。本稿では、ānāftan = 「回

pad ānābyārān<sup>(260)</sup> 《bizeškīgyār》<sup>(261)</sup> rāyēnidārih [ud]

nērōg az waran <ud>

abāriḡ druz pad čihr čērih ud ③ān ī pad tan

dwārišnig

gēhān marnjēnidār + dēwēs n mar [i] gurg ud xra-

fstar u-šān

第39ページ翻訳

---

援助の付与 (dāšn) は移ろうことがない。デーウであるところ

のものどもは

極悪人共たる援助者が援助しても 亡びるのである。そして

人間援助者の仇敵たる人間 — それはデーウである — へのそれ

(u-š の -š =援助) はデーウ援

助であることは明らかである。ウェフ・デーウ者たちと共にある

pand (=andarz) は、かの邪悪にも拘わらず

(それを) 正善に変換する手段は知と

抗争することではなく、実践を伴う、正善の愛好とそれによる

---

避する、拒絶する」の語根 ānāb- に yār = 「援助者」が加わった形を想定して、その複数形 ānābyārān = 「撲滅者たち」と解釈した。他に在証しない単語ではあるが、テキストの綴りをそのまま生かせる利点があるし、この訳語なら文意も通る。

261 解釈の分かれる語。Menasce [1973: 59] は、転写は示さずに、de médicaments と訳している。Fazilat [2002: 181 A ʔ] は、bizeškīg dārōg と転写して、pezeshki-dārūyī と訳している。しかし、テキストには、最後の -ōg に当たる綴りはない。本稿では、「撲滅者たち」の言い換えと考え、bizeškīgyār = 「医療者、看護師」と解釈した。これだと、テキストの綴りをそのまま生かせる。



幸福の

創出である。そしてかの極悪者（共）は知によって正善に改

換するとはウエフ・

デーンの容認するものにして指南者である。

(48) もろもろの創造物のもろもろの肢分 (mēnōg · čīhr · tan) の

対抗者の種類と彼らの

力の制圧とについて。ウエフ・デーンの示教から。

さて、Ohrmazd のもろもろに創造物に対する対抗（者）の種類は

要するに 三。①一つはメーノグ（不可見分聖）において、そして②一つ

は本性において、そして

③一つは肉体において、侵入する仇敵である。メーノグにおいて侵

入する

仇敵はメーノグ的デーウとドルズであって、彼等の力 — 邪

教、デーウ崇拜およびその他の悪習慣より来るもの — の制圧

はウエフ・デーンのネーラング<sup>(262)</sup>たる祭儀の執行 — その他のよき習慣

262 MP. nērang. 原義では、ゾロアスター教の祈禱句の一種を指す。また、この祈禱句は、浄化儀礼の際に牛尿と併用されることが多いので、転じて儀礼用の牛尿も指す。古代ゾロアスター教では、牛尿には不浄物を浄化する効力があると信じられた為、不浄物やそれらに触れた人・物に対して、牛尿を降りかけることが義務とされた。「ウィーデーウダード」第7章参照。なお、イスラーム時代以降は、Ar. nīranj, NP. nīrang となって、イスラーム教徒にとっては「詐欺、魔法」の意味で使われた。

を奉ずることから来る。また

②本性において侵入する（仇敵）は Āz や Arešk（嫉妬）および

その他の本性 — そは本性

たるの故を以て（padiš）美德に対する仇敵である — にして、彼等の

力 — Waran（貧婪）やその他の

ドルズが本性の中で優勢（čērih）となることから来るもの —

の制圧は撲滅者たち《施療師》

の処置から出る。また ③身体において侵入するそ

れ（仇敵）は

世を毀損する拝魔者 漢匪（mar），狼および害

毒物<sup>(263)</sup>にして、彼等の

---

263 Av. xrafstra-, MP. xrafstar。この語は、古代ゾロアスター教の展開を研究する上でのキーワードの1つである。教祖ザラスシュトラ自身は、「ガーサー」の中で、ヤスナ28-5, 34-5, 34-9の3回、この語を用いている。バルトロマエによると、この語は「xraf-=kərəf=死体」+「stra-=食べるもの」の合成語で、「ガーサー」の中では、ゾロアスター教を受容しない存在に対しての罵詈雑言として使用された。（Ch. Bartholomae, *Altiranisches Wörterbuch*, Berlin, 1904, p.538参照。）

即ち、東イランのどこか—ヘニング説を採るとすればホラズム、ニヨリや伊藤義教説を採るとすればスイースター—で成立した原始ゾロアスター教の段階では、この語を善悪二元論的な含意で使用する例はなかったと考えられる。

これに対して、紀元前1世紀頃に成立した「ウィーデーウグード」では、この語の用例はかなり増え、しかも「アンラ・マンユが創造した邪悪な爬虫類、昆虫類」、「見つけ次第に即座に殺すべき悪の存在」という善悪二元論的な意味に転換している。以後のゾロアスター教の伝統では、こちらの語義の方が定着し、パフラヴィー語文献『イラン版ブンダヒシュン』（TDI 写本のp.117以降）にも、「フラフスタルの状態について」の1章が設けられて、水生、地上生、空中生の3種類のフラフストラがリストアップされている。（山本由美子、「ゾロアスター教のフラフストラ観」、『史学雑誌』, 94-9, 1985, pp.1-29参照。）

このフラフストラの語義の転換は、紀元前5世紀頃にメディアから小アジアにか

けて分布していたマジ集団（イラン語 Magu に由来するラテン語 Magus の複数形）の影響の結果だと考えられる。ヘロドトス（紀元前484-430以降）の報告によれば、彼らは、メディアの6大部族の1つで、「蟻や蛇を始めとする爬虫類を先を争って殺す」という特異な習慣を持っていた。（ギリシア語文献に見えるイラン宗教の記述については、Emile Benveniste, *The Persian Religion according to the Chief Greek Texts*, Paris, 1929参照。）このマジ集団の習慣が、東イランから西漸してきた原始ゾロアスター教教団と習合することで、現在のゾロアスター教の原型が形成されたと推定されている。従って、フラフストラの語義の転換は、東イラン系の原始ゾロアスター教教団が西イラン土着のマジ集団と接触し、彼らの風習を吸収する過程の一齣と見ることができる。

このマジ集団は、爬虫類・昆虫類殺戮の奇習の他にも、曝葬や犠牲獣祭祀、最近親婚など、原始ゾロアスター教教団には確認されないかなり異様な風習をゾロアスター教に導入した。更に、教祖ザラスシュトラの生誕地を東イランからアゼルバイジャンのオルミーエ湖周辺に移し替える伝承を生み出し、自ら預言者の正統後継者と名乗り始める。（アゼルバイジャンに移し替えられた教祖伝説の集成としては、A. V. W. Jackson, *Zoroaster; the Prophet of Ancient Iran*, New York, 1968, pp.193-201参照。）ザラスシュトラ本人は「ガーサー」の中で zaotar- と自称しているし、原始教団はヤシュト13.94などで教祖を āθrauuān- と呼んでいる。（このアースラワンが、原始ゾロアスター教教団で神官階級を表す名称として定着し、次第に布教活動も担った。M. Boyce, "Āθrauvān-," *Encyclopaedia Iranica*, Vol.3, 1989, pp.16-17参照。）従って、原始ゾロアスター教教団は、どう見てもマジ集団とは異質の存在なのだが、欧米イラン学は一時期この伝承を真に受けて、原始ゾロアスター教教団の発祥地をアゼルバイジャンに比定した。

ハカーマニシュ王朝時代のイランの宗教については、何も分かっていない。図式的に言えば、東部イランにアースラワン集団、西部イランにマジ集団があり、ゾロアスター教の教義が東から西へ流れ込んできた時期である。しかし、どのような形態の「ゾロアスター教」が、どこでどれほどの勢力を持っていたか、全く不明である。ただ、ギリシア語資料によると、ゾロアスターはマジ集団の首領と捉えられているので、一部のマジ集団はゾロアスターの名の下に活動していたと考えられる。アレクサンダー大王のイラン征服以降は、小アジア地域のマジ集団はヘレニズム化し、ギリシア語文献にも「占星術、幻術、錬金術を行う集団」として記録されるようになる。（この段階でのマジ集団については、Joseph Bidez et Franz Cumont, *Les mages hellénisés: Zoroastre, Ostanès et Hystaspes*, 2vols, Paris, 1938参照。）

第40ページ転写

wānidārih abērdar pad warz [ud] + mārgan wimārēn

[i] burdār

ahlaw dahm pad xwadāyih nērōg az gurg ud

xrafstar

jadag-gōw <i> gēhān + dēwēsna ahlomō γ wēš ˙: (止)

(49) abar winārišn ī šādih ī abar abēzag mēnōgān

ただ、この「ヘレニズム化したマジ集団」についての報告が、どれだけイラン本国でゾロアスター教化したマジたちの実体を反映しているのか、不明である。而して、サーサーン王朝時代には、原始ゾロアスター教教団とは明らかに異質だったこのマジ集団が、最終的に「モグ、モーベド」として帝国の国教・ゾロアスター教の担い手に収まっているのである。

マジ集団の起源については諸説あり、イラン学者の見解は一致していない。モールトンによれば、マジ集団はメディアの祭司階級ではあったが、アーリア系でもセム系でもない来歴不詳の民族で、一神教的であった筈の原始ゾロアスター教を墮落させた元凶である。(J. H. Moulton, *Early Zoroastrianism*, London, 1913参照。)これに対して、メッシーナによれば、マジ集団こそ教祖の精神を受け継いで『アヴェスター』に「ウィーデーウダード」を書き加えたゾロアスター教の護教集団である。(G. Messina, *Die Ursprung der Magier und die Zarathuštische Religion*, Rome, 1930参照。)この論争の焦点の1つは、『アヴェスター』中に6回在証される maga- の語と、マジの呼称との関係である。メッシーナは、maga- を、神から授けられたデーン＝ゾロアスターの教えの意味に解した。しかし、単に「祭祀の際の供物」ともとれ、確定的な解釈は提出されていない。(伊藤義教、「ヤスナ51: 16 について」、伊藤 [2001: 71-110] 参照。)このように、マジ集団は、古代ゾロアスター教史上で極めて重要な役割を果たしたのだが、それにも拘わらず、その実体は謎に包まれた存在である。

以上、大局的に見れば、マジ集団の問題は、ズルヴァーン主義と並んで、東部イランから西漸する原始ゾロアスター教教団が遭遇した西部イランの文化への対応の問題であり、フラフストラの語義の転換は、その一過程である。

yazadān dīd⟨an⟩ ∴ rēš ud bēš +i-šān

amārān ī andar gumēzišnīg [ud] kōšišn az

nigēz ī Weh-Dēn

hād winārišn[ig] ⟨i⟩ šādīh abar abēzag mēmōgān

yazadān abāg ⟨-iz⟩

dīd⟨an⟩ ī +rēš ud bēš i-šān amārān hamgōhrān ī andar

gumēzišnīg kōšišn[ig] pad wēnišn i-šān kōšišn

①framān

ī pērōzih ī yazadān-gōhrān Ohrmazd dahišn abar tomīg

dēwān

druz ②gētīg<sup>(264)</sup> [ud] ānābišn ī ēbgat mān az +dāmān

③jāwēdān

winārišn ī yazadān-gōhrān andar hamāg ēwēnag

nēkih [i] ud ④āhan-

jīšn i-šān menišn ō ān ī asazišnīg rāmišn

+kēšdārān

---

264 テキストには、gyt'hまたはst'hとある。Menasce [1973: 59]は、spāhと転写して、l'arméeと訳している。Fazilat [2002: 184 А Э]も、この解釈を踏襲している。この場合、spāhとānābišnの間で文章が区切れて、文意は、「①暗黒的諸魔とドルズの軍勢に対する勝利の終末、②諸創造物のもとからの仇敵の巢窟の掃討」となる。本稿では、gētīgと転写して、表記のような訳文に至った。両方の解釈が可能である。

kē gētīg frazām ī frahist mardōm rāyēnid rāyišn

ō druwandih ud jāwēdān aziš abōxtišn hamāg anāg

dušoxwīgih zāmihīdan kēš ī-šān<sup>(265)</sup> abāg wad fra-  
zāmih ī

dādār kār ud xrad-+iz [ī] rāmišn abar frazām  
āgāhān

+abēzag mēnōgān yazadān nūn-iz ud pad frazām  
[ī] abar kas-iz

+az-iz awēšān ī-šān kēš wahišt ēstēd patt<ū>gih  
<ud>

+hamkardagih ī abāg ān +hamgōhrīh ī-šān kēš owōn  
wād

+frazāmih +nimāyēd guft bawēd ˙˙

第40ページ翻訳

---

力 — そは狼や害毒物，世界の拝魔者，破義者の

多くの異端者より出る — の制圧は殊に蛇除けの打蛇  
棒（warz）の携帯者，

統治にあたって敬虔なる義者によってである。

(49) 清浄なるメーノーグ諸神の上にお喜びが支配す

---

265 2行下の [ī] を指す。

ゾロアスター教書籍パフラヴィー語文献『デーカルド』第3巻訳注・その4

ること（並びに）混合界での闘争における

無数の人々の傷と痛みを見ることについて。ウエフ・

デーカの示教から。

さて、清浄なるメーノグ諸神の上にお喜びが支配することは、彼等

無数の同質者らの、混合界での闘争の中における傷と痛みを

見ることともに、彼等、神々の実質をもてる無数のものら・Ohrmazdの

創造物の闘争が①暗黒的諸魔・ドルズに対する勝利の

終末、②諸創造物のものからの仇敵の巢窟のゲーティグ的掃討

③神々の実質をもてるものたちをして

あらゆる種類の幸いの中に

永遠に統治すること、および④彼等の心を

移ろうことなき平安に引きつけるものであること、を見ることによってである。

ゲーティグ界の終末は殆んどの人間を不義に

導き、かつ それからは永遠に救出されないこと（および）あらゆる

不祥なる

悪界的なるものが招来されると説くドグマ者たち — その彼等は

創造主の行為と知恵が悪しき終末

を招来するとの故を以て (abāg), 終末を知り給う

清浄なるメーノグ者たちなる神々の終末に関するお喜び — それは

最勝界あり, 同質者たち

と共に忍耐し且つ結束せよと説くものたち (awēšān) の

誰もの上に今もそして終末にも (あるもの) — は, このように (owōn)

悪しき

終末を示すことを説いているものだと言ったことになる。

第41ページ転写

---

(50) abar weh-išān wehdar ud wattar-išān

wattar az nigēz ī Weh-Dēn

hād xwad [ka xwad] wehīh pad +abarīgān

tuwānīgān meh-zōrān nēkih wēš-waxsišnih rāy

wehdar

[ud] pāyag ud pāyag [ud] +tā ān ī abardom <ka> pad ān ī

abar nēkih ud

sūd aziš freh kū <ka> pad ān ī azēr owōn kū ka pad

gyān sūd-+abgārdar kū ka pad tan hēnd kē ān

+gyān [ud] <ēdōn-iz> ka pad [xwadāy] kadag xwādāy <ud> kada-



giyān [kū]

ka pad deh sālār [deh] ud dehīgān ka pad +šahryār

[šahr] <ud> šahriḡān ud ka pad dēn ud dahibed kē

amaragānīg padiš

ēstišnih <ī> gēhān <ud> gēhānīgān čiyōn az wehih ī

wisp-tuwān

abardom dādār hamāg dahišnih [ī] weh winirdagih

pāyram

nēkih [ī] kē rāg weh-išān wehđar wehih ī dādār .:

xwad ka xwad wattarih pad abariḡān tuwānīgān

meh-zōrān

wēš-damišnih ī aziš anāḡih rāy gēhān-

zyāndar ud wattar

pāyag ud pāyag [ud] +tā ān ī abardom ka pad ān ī

abar anāḡih ud

zyān aziš [rāy] freh <kū> ka pad ān ī azēr owōn

kū ka <pad> gyān

zyāngardar kū ka pad tan hēnd kē ān gyān

ēdōn-iz ka

pad kadag xwadāḡ <ud> kadagiḡān ka pad deh

sālār ud dehīgān

ka pad šahryār [ī šahr] ud šahriḡān ud ka pad

dahibed

ud dēn kē amaragān padiš ēstišnih frehsūddar<sup>(266)</sup>

[+ud] + garān- + damišndar

第41ページ翻訳

---

(50) 彼等（人間）の善がよりよくなり、また彼等の悪がより

悪くなることについて。ウエフ・デーンの示教から。

さて、自体 善なるときは自体は、上位者

有能者、大力者とともであれば、幸いは大いに成長するが故に、

一歩一歩とより善くなり、遂に最高のものとなる。高いものと

ともあるときは、それより出る幸いと利は低位のものともなるとき

よりもより多く、あたかも生霊とともに

あるときは、彼等が身体とともにあるときよりも、よりよく利を与える

が如くである。その

生霊なるもののことだが、家長や家人たちともなるとき、

---

266 解釈の分かれる語。テキストには、plyhswttl とある。素直に読めば、frēhsüddar と転写して、「より利益のある」と訳すしかない。しかし、Menasce [1973: 60] は、frayziyāntārtar と転写して、d'un plus grave dommage と訳している。また、Fazilat [2002: 188 八七] も、これを踏襲している。しかし、kē 以下は国王やデーにかかるとのさうし、これらは当然「利益あるもの」なので、敢えてテキストを改変してまで正反対の「実害あるもの」にする必要は乏しいように思われる。

ゾロアスター教書籍パフラヴィー語文献『デーンカルド』第3巻訳注・その4  
村長や村人たちとともになるとき、州長や

州人たちとともになるとき、且つまた Dēn や国王 — これらは無数

の人たち即ち世界や世界の人たちがよってもって

存立しているもの — とともになるとき、こうなるのである。それは宛も

全能最高なる創造主の

善から すべての創造物のよき暮らし

一般人の

幸いが生じるが如きで、この故に彼等の善がよりよきものとなるの

は創造主の善性（によるの）である。

自体悪なるときは自体は、上位者、有能者、大力者

とともにあっても、

それ（悪）から生じる不祥の より大きい圧力の故に

ますます世を害し そして一步一步と

より悪くなり、終に最高のものとなる。高いものとともにあ

るときは、それから出る不祥と

害は 低位のものとともになるときよりも より多く、宛かも

生霊とともにあるときは、

彼等が身体とともにあるときよりも、より有害であるが如くである。

その生霊なるものことだが、家長

や家人たちとともになるとき、村長や村

人たちとともになるとき、

州長や州人たちとともになるとき、且つまた

国王

や Dēn — これらは無数の人たちがよってもってより大利ある

暮らしをしているもの — とともになるとき、こうなるのであり、

世の人々により重い圧力を加え

第42ページ転写

---

wēš-zyāndar ō gēhān mardōm kē rāy agar<sup>(267)</sup> pad

kām ayāb pad

abāz dāštan ayāb pad + uzdehišn<sup>(268)</sup> ī aziš tis-iz

wadh

ō wisp ōz bun ud abardom dādār paywastan

gōwihēd čiyōn

kēšdārān abar dādār pad + jomā wehīh <ud>

wadh aziših-iz

kēš ud saxwan abāg ka<mi>st-windīd <i> wehīh + garān-

damišndar ud garān-

zyāndar az har + wadh ud az hamāg + wad wattar

guft ēštēd kē wadh padīš :

(51) [ud] abar + astān + ēwēnag az nigēz ī Weh-Dēn

---

267 Menasce [1973: 60]は、ここを C'est pourquoi, que ce... と訳して、この agar = 「もし」を完全に無視している。この為、仮定文が平叙文になり、文意を甚だ損なっている。

268 解釈の分かれる語。テキストには、'wz dhšn とある。Menasce [1973: 60]は、ōz dāšn と転写して、le renforcement と訳している。この場合、文意は、「(創造主の) 意欲に沿うにせよ、支障があるにせよ、強化によるにせよ」となる。Fazilat [2002: 188 A V]は、āhanjīšn = 「引き抜くこと」と転写しているが、テキストとの乖離は最も大きい。ただ、3つの解釈のどれを採っても、一応の文意は通じる。

ゾロアスター教書籍パフラヴィー語文献『デーナカルド』第3巻訳注・その4  
hād astān ēwēnag [ud] ēn-iz 3 ∴ ①ēk ān kē<sup>(269)</sup> xwadīh

amarg u-š<sup>(270)</sup> paymōzan asānišnih ②ud ēk ān kē xwadīh amarg u-š  
paymōzan wisānišnih ∴ ③ud ēk ān ī kē xwadīh  
margōmand u-š paymōzan asānišn<īh> (1) az +awēnišnig stiyān

amahraspandān kē-šān xwadīh amarg ∴ u-šān  
paymōzan [ud] asānišnih

<a>margīh ī-šān xwadīh paydāg az-iz ān ī-šān  
+wimand ī ast

amarg [ī] abzōnīg ud asānišnih [ud] ī-šān paymōzan  
az-iz ān ī

---

Ormazd <ud> Wahman [ud] + Amahraspand [ud] ān ī  
āsnūdāg ruwān pānag ī tan

ān ī Amahraspand paydāg ud abārīg-iz ī Amahraspand  
pad amargīh ī

xwadīh ud asānišnih ī paymōzan ī dādestān  
ān ī Wahman

Amahraspand ud pad hamīh ī-šān xwadīh ud  
paymōzan xwānihēnd

Amahraspand +ud +dārēnd dāmān baxšēnd ray ud xwarrah  
[ud] ō

gēhān ēdōn-iz abārīg mēnōg yazad ∴ ud az

---

269 Fazilat [2002: 191] は、ここに pad を挿入しているが、テキストには存在しない。

270 Fazilat [2002: 191] は、ここに aziš を挿入しているが、テキストには存在しない。

wēnišnīg stiyān

xwaršēd kē-š amarg ast sti ī xwadīh ud asānišn<ih>

paymōzan

第42ページ翻訳

---

より多くの害を及ぼすことになり、この故にもし（創造主の）意欲に  
沿うにせよ、或いはそれから  
乖離するにせよ 或いは離脱するにせよ、物の悪を

あらゆる力の根源にして至高なる創造主に結びつけることが

主張されること、宛かも

ドグマ者どもが創造主について 善と悪と

双方の来源として、

善は得るところ最少なりとすることとともに、教え且つ主張するが如くであ

るならば、どんな悪よりもより重い圧力とより重い

害を及ぼすこととなり、またどんな悪よりも もっと悪いと

言われており、それは悪がよってもって存立するものなのである。

(51)<sup>(271)</sup> 諸存在物の種類について。ウエフ・デーンの  
示教から。

さて存在物の種類はこの三のみ。①一つはその自性が不滅でその衣服

---

271 本章については、Molé [1963: 470-72] が、ゲーティーク界に於ける人間の至高性を表明した部分として、Shaki [1973: 152-155] が、ゾロアスター教の現象界論を表明した部分として、研究している。

ゾロアスター教書籍パフラヴィー語文献『デーンカルド』第3巻訳注・その4  
が不可分なるもの<sup>(272)</sup>。又一つはその自性が不滅でその衣服が可分なるもの。

又一つはその自性  
が可滅でその衣服が不可分なもの。(1) 目に見えぬ諸存在物の中

でその自性が不滅にしてその衣が不可分なるはアマフラスバンド

たちで  
彼等の自性の不滅性は不滅・饒益的 (awarg abzōnīg)

であるという彼等の定義から明らかであり、また彼等の衣服の不可分  
性は

Ormazd と Wahman なるアマフラスバンドは  
高貴なる霊であり、体の守護者も (これら2種の)

---

272 本章では、xwadih (原義は「自性」) と paymōzan (原義は「衣服」) の関係が焦点になる。Molé [1963: 471] は、前者を essence, 後者を revêtement と訳している。Menasce [1973: 61] も、この訳語を踏襲している。Shaki [1973: 153] は、前者を essence, 後者を form と訳している。しかし、これだと、本質と形相という哲学上は噛み合わない概念を並立させたことになり、疑問が残る。仮に、アリストテレス哲学の概念を応用していると想定すれば、本質/存在、形相/質料に当て嵌まる可能性があるが、この章がペリパトス派の影響を受けたという確実な論拠はない。また、Fazilat [2002: 88] は、前者を gouhar-e khvod = 「自己の本質」、後者を kālbodash = 「骨組み、身体」と訳している。

意味を探る手掛かりは、後段での用法である。①アマフラスバンドの場合：「自性という存在物」、「衣服—それは彼の光明なるものである—」、②人間の場合：「不滅な霊という自性」、「身体という衣服」、③害獣の場合：「自性は消失する」などの説明である。これらから判断すると、この2つの単語は、前者が「或る存在物のコアになるもの」で、後者が「それをコーティングするもの」と考えられる。おそらく、ギリシア哲学の影響ではなく、サーサーン王朝時代のゾロアスター教哲学が独自に築き上げた概念ではあるまいか。精神的なものと物質的なものと言い換えることができるかも知れない。

アマフラスバンドであるということから明らかであり、そして

その他のアマフラスバンドも その自性

の不滅性とその衣服の不可分性によって同様である。これは (i)

Wahman が

アマフラスバンドであること、そしてかれら (アマフラスバンド) はその自

性と衣服を一つにし給うことによってアマフラスバンドと

呼ばれて もろもろの創造物を支え ライとファルナフ<sup>(273)</sup>を世界に頒与して

いることを定義する (dādestān)

もの、であり、他のメーノグの神 (々) も同様である。また目に

見える存在物<sup>(274)</sup>のうちには

その自性という存在物が不灭であり、また衣服 — それは

---

273 古代イラン語の推定再建形 \*hvarnah-, Av. xvarənah-, OP. farnah-, MP. xwarrah, NP. farr で、語頭のxとfの発音は方言差に由来すると考えられている。

原義に関しては諸説あって一致していないが、概ね、ゾロアスター教文献の中では、「神威、幸運、(カイ王朝の) カリスマ、光輪」を、マーニー教文献では「高位聖職者への尊称」を意味する。Gh. Gnoli, "FARR(AH)," *Encyclopaedia Iranica* Vol.9, 1999, pp.312-319参照。

274 この sti (原義は「存在」) の語の解釈も、本章の理解の鍵になる。Molé [1963: 472] は、sti xwadih を、纏めて l'essence と訳している。Menasce [1973: 61] は、l'essence de l'être と訳している。Shaki [1973: 153] は、essence(sti) としているので、sti だけで essence と訳していることになる。Fazilat [2002: 88] は、gouhar-e hasti-ash と訳している。

意味を探る手掛かりは、本章中での用法である。「目に見えぬ stiyān の中で…は、アマフラスバンドである。」「目に見える sti のうちで…は、太陽である。」などから判断すると、「本質」や「存在」と云うよりも、単数・複数両方あり得るので、「存在物」と解釈すべきである。英語なら、existence よりも、entity である。なお、近世ペルシア語では、hastī で being, existence を表すとされる。Soheil Mohsen Afnān, *Vāzhenāme-ye Fārsī, 'Arabi, Engelīsī, Farānse, Pahlavī, Yūnāni, Lātin*, Tehrān, 1984, p.322参照。



彼の光明なるものである — が不可分なるは太陽

第43ページ転写

---

ī ast ān ī-š rōšnīh ēwēnag andar ham sāmān

[ud]

māh-iz ud starān ∴ [ud] pad amargīh ī xwadīh

ud +asānišāih ī

paymōzan ī dādestān ān ī xwaršēd pad hamīh

ī xwadīh [ī]

ud paymōzan [ī] xwānihēnd xwaršēd ud māh ud star

ud rōšnēnēnd

gēhān nērōgēnēnd čīhrān ud waxšēnēnd dām ∴ (2) ud ān kē

xwadīh

amarg u-š paymōzan wisānišnih amaragānihā mardōm

ī pad ān

ī-šān xwadīh ⟨ī⟩ ruwān amarg paymōzan ī tan andar

gumēzagīh sānišn-

ōmand pad hamīh āgenēn xwānihēd mardōm ī pahlom hēnd

⟨az⟩ gētīg dahišnān ∴ ud andar gētīg stiyān pad amargīh

⟨ī⟩ xwadīh ud +sānišnōmandīh ⟨ī⟩ paymōzan [ī] az dēn

wisp gōspand-iz

⟨ī⟩ dādestān ān ī mardōm ud abārig gētīg dahišnān

pad ān

ī-šān mēnōg Amahraspand kē-šān ast +xwadīh amarg

ud pad dēsag [ud] sānišnōmand hēnd pad ham-dar

dādestān ān ī

mardōm ud gōspand-iz [ud] čimīg ōh-iz ān ī paymōzan

dahišnān

+xwadīh čiyōn Wahmān ān ī āsnūdāg ruwān ī pānag

ī tan

[ī] hammis Amahraspand<sup>(275)</sup> paymōzan hēnd ī Ohrmazd

〈ud〉 Wahman xwad

[ud] ēn [u] ī āsnūdāg ruwān mardōm xwadīh abar

dahišnān

brāh ud bām +hēnd ī dādār ˙: (3) ud ān ī kē xwadīh mar-

gōmand u-š paymōzan sānišnōmand dēw ud gurg ud

xrafstar

pad ān ī az Weh-Dēn ōz pad fradom frāz srāyišnih

ī yašt-frawahr Zarduxšt dēwān [ud] kālbod škast

第43ページ翻訳

---

であり、同じ範疇の中に入る種類は

月と星辰である — それらの自性の不滅性と衣服の不可分性

---

275 テキストには、mānsarspand とある。「マンスラの利益者」でも意味は通じそ  
うだが、やはりアマフラスバンドと直すべき。

とにおいて — 。これは太陽が

自性と衣服が合一していることと

俱にあり 彼らが太陽と月と星と呼ばれてい

て世界を

照らし 諸本性を力づけ そして創造物を成長させていることを

定義するものである。(2) またその自性が

不滅で且つその衣服が可分なるものは一般的に人間で、

彼等の

不滅なる霊 (ruwān) という自性と混合界において可分なる

身体という衣服が

相合一することによって彼(等)は人間とよばれ、ゲーティীগ的

諸創造物中の最高者となっている。又、ゲーティীগ的存在物の中でその

自性の不滅性と衣服の可分性により、デーン(の示教)によれば すべて

益畜も(同様である)。

これは人間やその他のゲーティীগ的諸創造物を、彼等のメーノー

グ的なるアマフラスバンド —これは彼等の不死なる自性(そのもの)である—

と可分なる形体<sup>(276)</sup>と共なるものとして定義するもの。同じ主類

の定義に

---

276 この dēsag (原語は「外見」)の語の解釈も、本章の理解の鍵になる。Molé [1963: 472] は、forme と訳し、Menasce [1973: 62], Shaki [1973: 154] も、これを踏襲している。しかし、paymōzan とは別の概念であるし、本稿では、哲学的な「形相」のニュアンスを帯びた form より、「形体」の訳語を採った。

人間と益富も入れるということも重要である。これはまさに、この衣服は  
諸創造物の

自性で、それは高貴な靈（そのもの）であり、身体

の庇護者である Wahman が

（他の）アマフラスパンドとともに Ohrmazd の衣服であるように、

Wahman 自身もまた

この高貴な靈（そのもの）であり、諸創造物に君臨する人間の

自性、

創造主の光芒と光華<sup>(277)</sup>である、ということである。(3) また その自性が  
可滅

にしてその衣服が可分なるものは dēw と狼と

xrafstar。

---

277 この部分の文意は、「(第1天使)ワフマンは、…人間の自性であり、且つ創造主の brāh と bām である」となるので、この brāh と bām の解釈が重要になる。Molé [1963: 472] は、前者を flamme、後者を lumière と訳している。Menasce [1973: 62] は、前者を éclat、後者を brilliance と訳している。Shaki [1973: 154] は、前者を brilliance、後者を ray, beam と訳している。Fazilat [2002: A9] は、前者を partou-hā, rakhshandegī-hā と訳している。何れの訳も、「光、輝きを発するもの」を別々の表現で言い換えていることになる。

しかし、『デーンカルド』第3巻第123章 (Madan [1911: 124, ll.16-19]) では、創造主からゲーティエグ界に発した光の流出過程として、rōšn → payrōg → brāh → bām → rāh → dādār → afrišn の順が記述されている。(Shaki [1973: 155] 参照。)つまり、前4者は、創造主の創造行為に至るまでの、光の流出の諸段階を示していると考えられる。仮に、第51章と第123章に用語の共通性があるとすれば、この部分は、「第1天使ワフマン=人間の自性は、オフルマズドの創造行為以前の第3段階と第4段階の光から構成されている」と述べていることになる。ゲーティエグ界に於ける人間の至高性を述べている論旨とも合致するので、本稿ではこの解釈を採る。

ゾロアスター教書籍パフラヴィー語文献『デーンカルド』第3巻訳注・その4  
ウエフ・デーンからの力により 故ゾロアスターの最初の

宣教により 諸デーウの軀体は裂け

第44ページ転写

---

pad ān ī Ušēdar gurg-iz pad ān ī +Ušēd⟨ar⟩ māh xra-

fstar-iz

kālbod škast u-šān xwadīh pad ān ī abzār ⟨i⟩

frašagird

ud sūdōmand [i] pērōzgar [i] rasišn hamāg abesi-

hid[an]

pad hamāg abesihišnih ī awēšān mardōm xwadīh

amarg ruwān ⟨ud⟩

tan [ud] paymōzan hammis gōspand ān ī [nē]

pas nē sāniš⟨nih⟩ēd

abāg amarg xwadīh ruwān purr urwāhm

andar abēzag ;ud +a-

petyārag gēhān hamē winārišnīg bawēd az

dādār dahišn nōg ud

abāz kardan asānišnīg winirdan paydāg :

(52) abar rāyēnišn ⟨i⟩ dādestān abāg Dēn

hād dādestān pad zahag ī āsnxrad abāg Weh Dēn

ēkwardagig brādarīh-iz padiš wābarīgānīgih ud padīrišn ud

rawāgih ud pad ān ī dādestān āsnxrad āsnxrad pad

mardōm ī hamāg ān ī ham-[w]astag mardōm padiš

wāspuhragānih<sup>(278)</sup>

ud ān-iz ī agdēnān pad fragānih [ud] nihumbih

+ wirrōyišn rawāg〈ēnēnd〉

ī-šān agdēn [ī] zyānīgih ōwōn barēnd čiyōn paygālgar pad

zarr ō srub hamīg srub pad zarr nām rawāgēned

az im

bun ka andar handāzišn ī šnāsagān agdēnih abāri-

stagih pad-iz tarāzūg ī ham + dādestān wānidārih

bawēd ān ī

abāristagih ān ī pad handāzišn ī + Weh Dēn ristag

ō

dādestān āstaw〈ān〉ihēd 〈ī〉 ast ham zahag pad

āgenēn zahagih

ī-šān āsnxrad ī Ohrmazd ˙˙<sup>(279)</sup>

第44ページ翻訳

---

ウシェーダルのによって狼のも、ウシェーダルマーフのによって  
フラフスタルも

---

278 「特別なもの」の他に、「宮廷人」の語義もある。両方の訳が可能。

279 Madan 版第44ページの第21行目（最終行）まで。

ゾロアスター教書籍パフラヴィー語文献『デーナカルド』第3巻訳注・その4  
軀体が裂ける。そして彼等の自性はかのフラシヨギルドの力

と利益的な勝利者の到来とによってことごとく消失す  
る。

彼等の全面消失により 人間の自性即  
不滅の霊と

身体即衣服は益畜（のそれ）とともに  
以後、不滅の自性と分離

することなきものとなり、（かくて）霊は歓喜に充ち  
清浄にして敵対者なき世界において

つねに主動者となり、

創造主の創造物から新しくしかつ

元に戻すこと、分離することなき安住があらわれるであろう。

(52) デーンと合致しての、裁決の指導（性）について。

さて、裁決は根本智<sup>(280)</sup>の子としてウェフ・デーンと

同腹の兄弟関係にあり、それ<sup>(281)</sup>によって信憑され そして受容され そして

---

280 パフラヴィー文字表記上は、āsnō-xrad もある。意味は、「根元的な叡智」、  
「(デーンから) 先天的に付与された叡智」である。対義語として、gōšōsrūt-xrad  
=「耳で聞いた叡智」、「後天的に獲得した叡智」がある。Ōshīdarī [1999: 110] 参照。  
イスラーム哲学の ma'rifat, 'irfān = 「神秘的叡智、グノーシス」と 'ilm = 「獲得する  
知識」の相違に対応しているように思えるが、歴史的な関連ははっきりしない。

281 根本智を指す。

進展する。そしてその裁決によって (or 裁決を通して) 根本智が  
すべての人間に根本智となつて  
おり、同じ出来の人間はこれによって特別なものとなっている。

然るに、邪教徒は本地 (地金) を隠すことによって信仰を弘め  
ており、  
その彼等が邪教の害悪をもたらすこと宛かも 盃器 (コップ) の制作者が

金を鉛にまぜ乍ら鉛を金の名で宣伝しているが如くである。

この

基本からもし (ka) 賢者たちの裁量の中に邪教の反習法性が

あるときは この裁決の秤によってこそ反習法性が打破ら

れることになり、ウェフ・デーンの裁量にもとづく習法が

信を得て裁決となるが、それ (裁決) は Ohrmazd のものたる  
彼等の根本智とは

互いに子たる関係にある同じ子なのである。